

オリンピック金メダリストがスター選手になった際の報道環境

トップスポーツマネジメントコース

研究指導教員：平田 竹男 教授

5012A303

大橋未歩

本研究は過去のオリンピック金メダリストがスター選手になった際の報道環境について明らかにしたものである

1. 背景と目的

オリンピックとはアマチュアスポーツ最大の国際競技大会であり、2012年に開催されたロンドン五輪には、204の国と地域から約11000人が参加し、26競技302種目が行われた。オリンピックは世界の50億人が視聴すると言われており、日本国内でも五輪が開催される年にはアマチュアスポーツ報道量が格段に増える。また五輪関連番組は高視聴率を獲得することなどから、日本においてもオリンピック人気が高いことが伺える。

筆者はテレビ東京のアナウンサーとして、アテネ五輪、北京五輪、ロンドン五輪と3度にわたり現地で取材してきた。日本選手が華々しく活躍した3大会であったが、オリンピック報道に携わる中で、違和感を覚えたことがあった。それは競技結果とその後の知名度との間に差異が生じる選手がいたことである。勝敗や記録という明白な結果が出るスポーツ選手は競技結果に則した市場評価を受けてしかるべきであるが、必ずしも全員がそうではない現状が存在することに対し、メディア報道手法が何らかの影響を与えているのではないかという問題意識に至った。そこで本研究では、本来スターになってしかるべきオリンピック金メ

ダリストがスター選手になるための報道内容と手法を明らかにすることを目的とする。

2. 研究手法

手法1-1ではラテ欄（テレビ欄）上の名前登場回数を選手のテレビ報道量とし、各大会における金メダリストのラテ欄登場回数をカウントした。3大会の五輪開幕約1週間前～閉幕約1週間後までを調査期間とし、該当日の読売新聞の朝刊を、調査対象ラテ欄として調査した。各大会の「オリンピック前半戦総集編」と「オリンピック総集編」を除き、名前だけでなく該当する愛称（例：ヤワラちゃん）や総称（例：レスリング4人娘）もカウントし、金メダリストの各大会における報道量の推移と格差を分析した。

手法1-2では、対象選手の中で報道量他に比べて多い選手や、同種目で差異が生じている選手など特徴的な選手におけるラテ欄記事やインタビュー内容等の報道の変遷を追った。

手法2では若年層におけるロンドン五輪出場選手の中で好きな選手、またその理由を調査するために早稲田大学の学生702名を対象にアンケート調査を実施し、好きな理由を統計分析した。

3. 研究結果 1

アテネ五輪では大会前から金メダル最有

力候補として注目されていた北島康介選手の報道量が突出して多かった。一方、五輪3連覇の偉業を達成した野村忠宏選手の報道量は少なかった。北京五輪では2冠2連覇を達成した北島康介選手の報道量がアテネ五輪の山型から、引退報道も影響し五輪を通して報道量が持続する台形型に変化していた。ロンドン五輪では、内村航平選手の報道量が突出しており、アテネ五輪における北島康介選手に似た大きな山型を形成していた。次に吉田沙保里選手が多かったが、北京五輪においては伊調馨選手よりも報道量が低かったため、北京からロンドンにかけての上昇率が目立った。

記事、インタビュー分析から、北島康介のインタビュー時における言葉や、谷亮子のシドニー五輪での「最高でも金、最低でも金」、アテネ五輪での「田村でも金、谷でも金」、北京五輪での「ママでも金」という言葉が多くメディアに取り上げられていることがわかった。また、北島康介に対する「引退なのか」、「最後に向けた思い」や「姉の雪辱伊調姉妹」などの記事も多くメディアが取り上げていた。他に谷亮子と野村忠宏の柔道決勝時刻が重なっており、谷のインタビュー時間が長時間に及んだ一方、野村のインタビュー時間が「最高」の一言で終わるものであったことがわかった。ラテ欄によく見られる記載事項の傾向欄によく見られる記載事項の傾向としては、「家族」「ライバル」「恩師」が多かった。

5. 研究結果2

好きなスポーツ選手の理由における統計結果からは、「優れた競技スキル」「人生の歩み方に共感」「努力家」「広く知られてい

る」「責任感がある」に優位性が見られた。

6. 考察

ラテ欄研究からは、試合後のインタビューから得られる「言葉」やその選手の「物語性」や「ストーリー性」が報道に大きく影響することが考察された。若年層におけるアンケートからも「努力家」「人生の歩み方に共感」に優位性が見られ、選手のストーリー性に視聴者は共感を求めているということがわかった。また、日常的に報道されているわけではないオリンピック選手の場合、普遍性を持たせて報道することには一定の意義があることが示唆され、「家族」「ライバル」「恩師」から『共感』を、また競技中とのギャップのあるパーソナリティ、つまり『親近感』を獲得することの重要性が考察された。アンケート結果からも「広く知られている」因子に有意性が見られたことから、その選手が醸し出す親近感が好まれる要因として存在しているということが同様に明らかになった。

さらには、同日に他種目が開催されるオリンピックにおいては、複数メダリストが誕生することを考慮し、報道時間の「枠」と「タイミング」に対する意識を、選手、コーチ、競技団体が一体となり高めていくことがメディア側に必要であるとも考えられる。

7. 総合考察

3大会のオリンピックを通じて、金メダルを獲得したにも関わらず、選手によって報道に偏重が生じてしまったことに対してメディアの責任が非常に大きいと考えられる。その責任を認識した上で論理的判断基準を持ち、報道していくことが求められる。

